

高齢化社会と地域福祉 (17)

——韓国農漁村地域の Social Capital と
中高年の「生きがい感」に関する予備的調査——

高崎 義幸・日隈 健一

(受付 2010年11月1日)

I. 序論 (問題の所在と目的)

高齢化の進行や平均寿命の延伸が社会問題として顕在化すると、退職後の人生をいかによく生きるか、といった幸福な老いに関する研究に加えて、高齢者の「生きがい」に関する研究が国や自治体の高齢者に対する社会保障給付費の増加に対する政策対応策としてなされてきた。しかし、日本語で「生きがい」という言葉は“生きるはり合い”として馴染み深いものであるにもかかわらず、その意味は多義的で、どちらかというといまいで国や地方自治体の計画などにおいてもはっきりとした定義づけがあったわけでもない。そのため「生きがい感」の測定尺度設計においてさまざまな模索が試みられている。

例えば、近藤(2007)や鶴若(2003)らによると、1960年代から70年代にアメリカで開発された主観的幸福感や生活満足度を測定するための尺度が日本語に翻訳され、それが「生きがい感」の測定尺度として代用されてきた経緯がある。また、「生きがい」は生活満足度と関連するという報告¹や健康寿命あるいは高齢者の生活態度、生活満足度との正の関連があるという報告が多い。なかでも高齢者の「自立度」とは強い関連があるということの中で、農山村と都市など地域特性とにおいても違いがあることなどの報告²がある。

高齢者比率の増加と低経済成長下、財源の圧迫という現実の中で選択された高齢者の「自立」という政策対応は、それを支える「生きがい」との関係性が明らかになった以上、さらに高齢者支援施策の実践や研究が有効に行われるためにも「生きがい」の概念や関連要因の解明と、その「生きがい感」を測定する尺度のさらなる客観的妥当性と信頼性を高めることが急がれた。しかし社会学的研究としては多様な文化や社会環境下、その時間軸と空間軸において生活する高齢者の、その「生きがい感」が変容するという事実も確認される必要があった。そのうえで、「生きがい」を測る尺度および「生きがい」の関連要因、影響要因がそれぞれの地域社会のもつ背景によって時間的にも空間的にも特長をもつが、高齢者の「自

1 藤本, 2004

2 日隈ほか, 2003, 高崎・日隈, 2006, 2007, 2009

立」という点に関しては「生きがい」が大きな要因となっている、という仮説を立証するものでなければならなかった。そうしたうえではじめて政策対応上の有効な変数となるからである。

本調査報告は前回の調査報告³の続編として位置づけられる。前回の調査報告では韓国の農漁村地域において、高齢者がどのようなとき「生きがい」を感じているのか、その実態を把握し、また「生きがい感スケール」(K-1式)を使用して高齢者の「生きがい感得点」を測定し、その関連要因を把握するとともに尺度の信頼度をテストした。しかし、高齢者の「生きがい感」の関連要因として投入した変数は個人的・社会経済的要因だけであり、その他の要因を加えてさらに分析の質を高める必要があった。なぜなら、人間は生まれたときから社会環境および人間関係の中で様々な影響を受けながら生きているからである。とくに農漁村地域の場合、地域社会における人々のつながりや信頼関係、協力関係などが個人に及ぼす影響が大きいと考えられるが、このたびの調査地域である韓国の場合とくにそうである。こうした地域社会で生活していく際に重要な要件である人々のつながりや人間関係といったものが、Social Capital (日本語では社会関係資本あるいは社会的資本と訳されることが多い)という言葉で概念化され、さまざまな分野で研究が行われている。

そこで本調査の目的は、Social Capital と地域の中老年者の「生きがい感」との関連を明らかにするための予備的調査を行うこととし、調査項目には先行研究において「生きがい」との関連が報告されている家族関係⁴も変数に加え分析した。

II. 理論的背景

1. 「生きがい(感)」とは何か

「生きがい」とは何かについて、いまだ統一された定義はみあたらないが、欧米を中心に発展してきた主観的幸福感 (Subjective well-being), 生活満足度 (Life Satisfaction), 生活の質 (QOL) など人間の精神状態を表す概念の一つであるといえる。日本では、幸福感や QOL よりも馴染み深いという理由で自治体を中心とした「生きがいづくり」事業や高齢者施策などにおいて「生きがい」は普遍的に用いられている用語である。

以下、文献研究と調査にもとづく高齢者の「生きがい(感)」の定義・概念、規定要因に関する研究について概観する。

長谷川 (2003) は、62件の国内外の「生きがい」および「生きがい意識」に関する文献研究を通して、「生きがい」を「今ここで生きているという実感、生きていく動機となる個人

3 高崎・日隈 (2010)

4 岡本 (2008), 高崎・日隈 (2007), 野村 (2005), 藤本 (2004)

の意識」と定義し、「生きがい」の構成要素を、『「生きがい」とは、「あなたの生きがいは何か」と尋ねられた時に、その人が過去の経験、現在の出来事、未来のイメージなどの「生きがいの対象」を心に思い浮かべ、これに伴って湧いてくる自己実現と意欲、生活充実感、生きる意欲、生存感、安定感（動揺）、効力感（無力感）、主動感などの種々の感情、つまり「生きがいの対象に伴う感情」を統合した主体性を持つ自己の心の働きから構成される』と規定している。野村（2005）もまた、国内外の34件の文献研究を通して、「高齢者の生きがい」の概念分析を行っており、「高齢者の生きがい」とは「高齢者が生きるために見出す意味や目的、価値であり、生きることに對する内省的で肯定的な感情の創出により実感される」と定義している。

以上の二つの研究は文献レビューを通して「生きがい」の概念・定義を規定している研究であるが、以下の二つの研究は調査を通じて「高齢者の生きがい」の規定要因を抽出し、定義づけている。鶴若（2003）は、後期高齢者の語り（narrative）アプローチにもとづいた調査を通じて高齢者がどのようなとき「生きがい」を感じているか、についての研究を行っている。調査の結果、高齢者の生きがい感要素として①連帯感、②充実感・満足感・幸福感、③達成感・追求感、④有用感、⑤価値の5つを抽出している。近藤・鎌田（2003）は、大阪府の老人福祉センターに通う高齢者へのアンケート調査によって得られた結果をもとに高齢者の「生きがい感スケール」を作成した後、その構造にもとづいて「高齢者の生きがい感」の定義づけを行っている。すなわち、高齢者の生きがい感は「毎日の生活の中で、なにごとにも目的をもって意欲的であり、自分は家族や人の役に立つ存在であり、自分がいなければとの自覚をもって生きていく張り合い意識である。さらに何かを達成した、少しでも向上した、人に認めてもらっていると思えるときにも、もてる意識」であるとする。

以上、「生きがい（感）」の概念・定義についての先行研究を概観してきたが、次に問題となるのは、韓国に「生きがい（感）」に該当する言葉や概念が存在するのかということである。神谷（2004；初版1966）の著書からは、『「生きがい」ということばは、日本語だけにあるらしい。（略）これを英、独、仏などの外国語に訳そうとすると、『生きるに価する』とか、『生きる価値または意味のある』などとするほかはないらしい』とある⁵。そこで日韓辞典や朝鮮語辞典を紐解いてみると、韓国／朝鮮語には「甲斐」に該当することばに「보람（ポラム）」という語が存在する。「生きがい」についての記載には、「生きる甲斐。生きるに値するだけの甲斐；値打ち」とあり、日本の大辞林における「生きるに値するだけの価値。生きていることの喜びや幸福感」とほぼ同様の説明がなされていることがわかる。したがって、韓国では日本語の「生きがい」とほぼ同じ意味のことばが存在するともいえるが、こうした辞書的

5 神谷，2004：10頁

な意味とは別にして、日本人だけが「生きがい」を持ちながら、あるいは感じながら生活しているとは考えにくい。

ちなみに韓国を含めた諸外国における高齢者の「生きがい」に関する調査報告⁶をみると、「生きがい」に関連の深い言葉（「心の張り」「充実感」「幸福感」「満足感」）を使用したり「生きがい（生きていることの喜びや楽しみを実感すること）を感じるのはどのような時か」というように、生きがいとは何かを説明したうえで調査が行われている。

2. Social Capital とは何か

1) Social Capital の概念

近年 Social Capital（以下 SC）という概念が政治、経済、社会、公衆衛生、教育など様々な分野で研究されてる。しかし、その定義に関しては、未だ統一された定義は存在していないのが実情であり、おおよそ社会（ミクロからマクロまで）における人間関係や人と人とのつながりによって生み出される信頼、互酬性の規範、ネットワークのようなものであると理解されている。SC の定義に関して代表的なものは、アメリカの政治学者 Robert. Putnam（1993）の「協調的行動を容易にすることにより社会の効率性を改善しうる信頼、互酬性の規範、ネットワークといった社会組織の特徴」、OECD（2001）の「集団内部あるいは集団間での協働を促進するような、共通の規範、価値観、理解を伴うネットワーク」などがある（農林水産省農村振興局，2007）。

2) Social Capital の分類

SC に関してはいくつかの分類方法がある。第一に、SC が及ぶ水準や範囲による分類で、個人レベルのミクロなものから、組織や地域社会などのメゾレベル、国家などのマクロレベルを区別する分類方法がある。第二に、SC の構成要素の特徴による分類として、認知的 SC と構造的 SC がある。認知的 SC は、互酬的な規範、信頼、信念といった価値観に係わるものであるのに対し、構造的 SC は、ネットワーク、規約、社会的組織など客観的にとらえることのできるようなものを指す。第三に、SC の性質による分類方法として、結束型（bonding）SC と橋渡し型（bridging）SC がある。結束型 SC は、地縁・血縁関係のように組織の内部の中における同質的な結びつきにもとづく社会関係で、強い信頼、互酬性の規範を生じさせる。それゆえ、内部志向的で外部のものに対して排他的な側面を持つこともある。それに対し橋渡し型 SC は、異なる組織間の異質な人や組織を結びつける、いわば架け橋のような緩やかなネットワークで結ばれた社会関係であるとされる。

6 内閣府（2005）、高橋（2001）

本調査地域との関係でいえば、農漁村地域は人口の流動性も少なく、地縁・血縁による共同体の性格が強いため、結束型 SC の高い社会であると考えられ、それらが住民の生活態度や意識に影響を及ぼしていると考えられる。

Ⅲ. SC と生きがい感の関連性

「生きがい」はきわめて個人的で主観的なものであるにもかかわらず、日本では社会保障費用の軽減を目的とするマクロ的な政策として注目され、主に高齢者の健康寿命の延伸策や社会的な孤立防止にくわえ、役割創出との関連において、自治体レベルでの政策介入が行われている⁷。

このように国や自治体の政策として採用されている「生きがい」をはじめ、主観的幸福感 (Subjective well-being)、生活満足度 (Life Satisfaction)、生活の質 (QOL) などの、人間の精神状態にかかる研究においては、個人の特性、社会経済的地位、家族関係、友人・知人関係 (ソーシャル・サポート、ソーシャル・ネットワーク) などが人間の精神状態に影響を及ぼす要因であることが、すでに数多くの研究で報告されてきている。しかし問題は、多くの先行研究において報告されてきたこれらの要因以外の要因を発見することであった。

こうした状況において、アメリカの政治学者の Putnam (1993) が SC という概念を提唱してから、日本でも SC と主観的健康感、主観的幸福感など健康分野との関連性を報告した実証研究が出てきている。市田 (2007) は、愛知県知多半島在住の高齢者9,248名を対象に、SC と主観的健康感および主観的幸福感との関連に関する研究を行っている。その分析の結果、地域要因である SC が、高齢者の主観的健康感・主観的幸福感の両者に好ましい影響を与えていることが示唆された、と報告している。また、藤澤 (2007) は、日本国内に居住する20歳～75歳未満の男女3,000名を対象に、SC が主観的健康感に及ぼす影響について研究している。その分析の結果、複数の SC 変数が全体的健康感に一定の影響を与えていることが明らかになった、と報告している。

このように、SC と健康、幸福感との間に何らかの関連があることが明らかにされつつあるが、SC と生きがい感との関連性を報告したものは見当たらず、地域における SC と生きがいとの関連を分析する必要性があった。

7 平成22年版 高齢社会白書

IV. 調査研究方法

1. 調査対象・方法

韓国一の穀倉地帯である全羅南道の最南端に位置する海南郡において、北平面永田里と山三面梅亭里の2つのマウル（集落）を調査対象地域として選定し、地域に居住する50代～70代の中高齢者を対象にアンケート調査を行った。

永田里は、海南郡のもっとも南に位置し、役場のある海南郡の中心部からバスで約1時間の距離にある人口233名、110世帯の集落で、農漁業が盛んな農漁村地域である。梅亭里は、海南郡の中心部からバスで約10分の距離で、郡の人気観光スポットである大興寺の入り口に位置し、農業にくわえて韓国の伝統的建築様式による民宿が盛んな、人口263名、113世帯の集落である。

調査は調査員が対象者の自宅または仕事場、集落の高齢者たちの集会所でもある敬老堂などを訪問し、調査に関する説明の後、同意が得られた人に調査票を配布した。調査票の読解および記入などに困難がある場合は調査員が読み上げた。分析対象は永田里が男性21名、女性25名の合計46名で、梅亭里が男性19名、女性21名の合計40名だった。

2. 調査期間

永田里の中高齢者については、2010年7月、梅亭里は8月に調査を行った。

3. 調査票の構成と内容

調査票は、中高齢者の「生きがい感」、家族関係、マウル（基礎集落）の Social Capital（社会関係資本）、被調査者の個人的特性・社会経済的地位から成っており、韓国国立木浦大学の李秀愛教授（家族社会学・家族福祉学）を中心メンバーとする専門家らと協議のうえ10名の調査協力者の予備調査の過程を経て作成された。

1) 従属変数：生きがい感

中高齢者の「生きがい感」を測定する尺度は、近藤・鎌田（2003）が開発した「高齢者向け生きがい感スケール（K-I式）」（16項目）をもとに、現地の状況を考慮し20項目からなる尺度を開発した。尺度の信頼係数（クロンバックの α ）は0.866で、信頼できる尺度であった。

回答は、「はい（2点）」、「どちらでもない（1点）」、「いいえ（0点）」の3件から選択するようになっており、最高得点は40点である。ただし、2、9、17番は配点が逆となる。

表1 中高年者の生きがい感尺度

変数	測定項目	尺度
生きがい感	1. 私には家庭の内または外で役割がある。 2. 毎日を何となく惰性（だせい）で過ごしている。 3. 私には心のよりどころ、励みとするものがある。 4. 私は充実した毎日を送っている。 5. 私にはやりたいことがたくさんある。 6. 生活が以前より良くなったと思う。 7. 私がいなければ駄目だと思ふことがある。 8. 今の生活は楽しく、張り合いを感じている。 9. 何のために生きているのか分らないと思ふことがある。 10. 私は家族のためになることをしていると思ふ。 11. 世の中がどう変わっていつているのか、たくさん関心をもっている。 12. 最近、平穏で安定的な生活を送っている。 13. 私は地域や近所のために有意義なことをしている。 14. 家族や近所の人たちは何か相談事があると私を訪ねてくる。 15. 私はいままで努力してきただけの成果や代償があったと思ふ。 16. 私は友達や近所の人たちと楽しい時間を過ごす。 17. 近所の人たちは私といっしょに過ごすことを好んでいないようだ。 18. この世の中は生きる価値があり、生きていることは良いことだと思ふ。 19. 子どもや孫のことを思うと心が満たされる。 20. 私は近所や地域にとって役に立つ存在だ。	3件 尺度

2) 独立変数

(1) 家族関係

家族関係を測定する尺度は，박희봉ほか（2008），한은정（2010）などの変数を参考にして作成した。尺度は家族信頼（4項目），家族親密感（4項目），家族サポート（4項目）および家族相互交流（4項目）から構成されている（表2）。

各尺度の信頼係数（クロンバックの α ）は，家族信頼が 0.716 ，家族親密感が 0.730 ，家族サポートが 0.865 であった。

(2) マウルの Social Capital

マウル（基礎集落）の Social Capital（社会関係資本）を測定する尺度は，이승철（2009），임우석（2009），박희봉・이희창（2005），市田（2007），内閣府（2003），農林水産省（2007）などの変数を参考にして作成した。尺度は，Putnam（2001）のいう Social Capital の構成要素である信頼，規範，参加，ネットワークからなっている（表3）。

各尺度の信頼係数（クロンバックの α ）は，信頼が 0.797 ，規範が 0.742 ，参加が 0.917 で，信頼できる尺度であることが確認された。

3) 統制変数

被調査者の個人的特性・社会経済的地位を統制変数とした（表4）。

表 2 家族関係測定尺度

変数	測定項目	尺度
家族信頼	1. 私の配偶者は、信頼できて頼れる人だ。 2. 私の兄弟姉妹は、信頼できて頼れる人だ。 3. 私の家族は互いに隠し事をするのではない。 4. 私は家族の意見を尊重する方だ。	5 件 尺度
家族親密感	1. 私の家族は互いに意見の食い違いなどなく、心が通じ合っている。 2. 家族の誕生日を祝うことは、私の家族においてとても重要なことだ。 3. 私の家族は互いに好んで会話をよくする。 4. 友達や隣人よりも家族といっしょに過ごす時間が一番楽しい。	5 件 尺度
家族サポート	1. 私の家族は困難なことが起こると、互いに意見を交わし合う。 2. 私の家族はお金が必要なお金が必要なとき、いつも助け合う。 3. 私の家族は体調が悪いとき、いつも看病しあう。 4. 私の家族は互いに関心を持ち、いつも気遣いあう。	5 件 尺度
家族相互交流	1. いっしょに住んでいる家族を除いて、会いたいときはいつでも会うことのできる家族数	名
	2. 離れて暮らしている家族との連絡頻度（会う、電話、メール） 3. 貴方の誕生日を祝ってくれる（プレゼント、食事など）家族 4. 家族の大小事（結婚、還暦、入院など）のとき、集まる家族	5 件 尺度

表 3 基礎集落マウル（里）の社会関係資本測定尺度

変数	測定項目	尺度
信頼	私的 1. 私は、この地域の人たちはみんな正直で良い人たちだと思う。 2. 私は、地域の人たちにお金や貴重品を預けることができる。 3. 私は、地域の指導者（里長/老人・夫人・青年会の会長など）たちが正直で誠実な人たちだと信じる。	5 件 尺度
	公的 4. 私は地域の役場の職員たちが正直で誠実な人たちであると信じる。 5. 私は、地域の農協、水協などの職員が正直で誠実な人たちであると信じる。 6. 私は、郡守や議会議員たちが正直で誠実な人たちであると信じる。	
規範	私的 1. 私は地域の人たちと言い争ったり喧嘩したりすることはない。 2. 私は地域で助けが必要な人がいれば、助けてあげようとする。 3. 私は地域に関することであれば、関心を持って積極的に参加する。	5 件 尺度
	公的 4. 私は地域の自然環境を壊す行為をしない。（ゴミを捨てたり、燃やしたり） 5. 私は、奨学金などの寄付行為は誰でもすべきことだと思う。 6. 私は地域の発展の助けになるなら、多少不便であっても行政の要求や規則を守る。	
参加	私的 1. 私は地域の集まりに積極的に参加する。 2. 私は地域住民の冠婚葬祭に積極的に参加する。 3. 私は、地域の人と行う余暇活動（旅行、運動、教育など）に積極的に参加する。	5 件 尺度
	公的 4. 私は地域で開催される懇談会や会議などに積極的に参加する。 5. 私は地域の奉仕活動（草刈り、町内清掃、環境美化など）に積極的に参加する。 6. 私は、地域の祭り、記念行事、スポーツ大会などに積極的に参加する。	
ネット ワーク	私的 私的な集まり・組織（頼母子講、同好会、運動・スポーツ、研究会、保存会など）への所属数	個数
	私的 私的な集まりや組織活動への月平均参加回数	回数
	公的 公式的な団体・組織（ロータリー・ライオンズクラブ、市民団体、NPO・NGO、農協組合員、老人会、婦人会、青年会、防犯・消防団、生活改善会など）への所属数	個数
	公的 公的な団体・組織への月平均参加回数	回数

（表4）

変数	測定項目
性別	男性 女性
年代	50代 60代 70代
宗教（信仰）	ある なし
学歴	総教育年数（ ）年
居住期間	（ ）年
同居家族数	（ ）人
主観的健康感	① とても悪い方だ ② あまりよくない方だ ③ 普通 ④ 健康な方だ ⑤ とても健康な方だ
職業	① 農業, ② 漁業, ③ 農漁業, ④ 畜産業, ⑤ 販売技術職, ⑥ 労務職, ⑦ 事務職, ⑧ 管理職, ⑨ 技術専門職, ⑩ 専門職, ⑪ 自営商工業, ⑫ 無職または主婦, ⑬ その他
世帯総収入 ⁸ （月平均）	① 5万円未満 ② 5万元以上 - 10万円未満 ③ 10万元以上 - 20万円未満 ④ 20万元以上 - 30万円未満 ⑤ 30万元以上 - 40万円未満 ⑥ 40万元以上 - 50万円未満 ⑦ 50万元以上 - 60万円未満 ⑧ 60万元以上 - 70万円未満 ⑨ 70万元以上 - 80万円未満 ⑩ 80万元以上
全般的な経済状況	① とても困難 ② 困難な方だ ③ 困難でも豊かでもない ④ 余裕がある方だ ⑤ とても余裕がある

4. 分析方法

各項目を単純集計した後、統計ソフト SPSS 17.0 K windows 版を使用して、生きがい感得点に対して性と年代を要因とする 2（男・女）× 3（50代・60代・70代）の分散分析を行った。次に生きがい感得点と個人的・社会経済的要因との関連を分析するため、相関分析を行った。

V. 結果および考察

1. 調査対象者の個人的特性・社会経済的地位

調査対象者の個人的特性・社会経済的地位を示した（表5）。

2. 性別と年代による「生きがい感」得点の平均値

表6は永田里と梅亭里住民の性別と年代による「生きがい感」得点の平均得点と標準偏差（SD）である。

8 2010年8月16日現在 100円=7.16円

(表 5)

人 (%)

区分	北平面 永田里			山三面 梅亭里		
	男性	女性	全体	男性	女性	全体
年齢						
50代	7 (15.2)	6 (20.0)	13 (28.3)	4 (10.0)	7 (17.5)	11 (27.5)
60代	8 (17.4)	12 (26.1)	20 (43.5)	3 (7.5)	6 (15.0)	9 (22.5)
70代	6 (13.0)	7 (15.2)	13 (28.3)	12 (30.0)	8 (20.0)	20 (50.0)
全体	21 (43.5)	25 (54.3)	46 (100)	19 (47.5)	21 (52.5)	40 (100)
宗教 (信仰)						
ある	7 (15.2)	13 (28.3)	20 (43.5)	10 (25.0)	18 (45.0)	28 (70.0)
なし	14 (30.4)	12 (26.1)	26 (56.5)	9 (22.5)	3 (7.5)	12 (30.0)
配偶者						
ある	21 (43.5)	20 (43.5)	41 (89.1)	18 (45.0)	13 (32.5)	31 (77.5)
なし	0 (0.0)	5 (10.9)	5 (10.9)	1 (2.5)	8 (20.0)	9 (22.5)
総教育年数						
0年	1 (2.2)	6 (13.0)	7 (15.2)	2 (5.0)	7 (17.5)	9 (22.5)
1～5年	3 (6.5)	7 (15.2)	10 (21.7)	3 (7.5)	4 (10.0)	7 (17.5)
6～8年	9 (19.6)	11 (23.9)	20 (43.5)	2 (5.0)	5 (12.5)	7 (17.5)
9～11年	4 (8.6)	0 (0.0)	4 (8.6)	3 (7.5)	2 (5.0)	5 (12.5)
12～13年	2 (4.3)	0 (0.0)	2 (4.3)	8 (20.0)	2 (5.0)	10 (25.0)
14～15年	1 (2.2)	1 (2.2)	2 (4.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
16年以上	1 (2.2)	0 (0.0)	1 (2.2)	1 (2.5)	1 (2.5)	1 (2.5)
居住期間						
10年以下	2 (4.3)	1 (2.2)	3 (6.5)	4 (10.0)	1 (2.5)	5 (12.5)
10～29年	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (5.0)	3 (7.5)	5 (12.5)
30～39年	1 (2.2)	4 (8.6)	5 (10.9)	0 (0.0)	6 (15.0)	6 (15.0)
40～49年	2 (4.3)	7 (15.2)	9 (19.6)	2 (5.0)	2 (5.0)	4 (10.0)
50～59年	4 (8.6)	10 (21.7)	14 (30.4)	3 (7.5)	3 (7.5)	6 (5.0)
60年以上	12 (26.1)	3 (6.5)	15 (32.6)	8 (20.0)	6 (15.0)	14 (35.0)
同居家族数						
一人	0 (0.0)	5 (10.9)	5 (10.9)	1 (2.5)	6 (15.0)	7 (17.5)
二人	15 (32.3)	17 (37.0)	32 (69.6)	14 (35.0)	11 (27.5)	25 (62.5)
三人以上	6 (13.0)	3 (6.5)	9 (19.6)	4 (10.0)	4 (10.0)	8 (20.0)
主観的健康						
悪い	8 (17.4)	12 (26.1)	20 (43.5)	4 (10.0)	6 (15.0)	10 (25.0)
普通	4 (8.6)	7 (15.2)	11 (23.9)	3 (7.5)	3 (7.5)	6 (15.0)
良い	9 (19.6)	6 (13.0)	15 (32.6)	12 (30.0)	12 (30.0)	24 (60.0)
職業						
農業	12 (26.1)	18 (39.1)	30 (65.2)	12 (30.0)	13 (32.5)	15 (62.5)
漁業	2 (4.3)	0 (0.0)	2 (4.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
農漁業	1 (2.2)	4 (8.7)	5 (10.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
専門職	1 (2.2)	0 (0.0)	1 (2.2)	0 (0.0)	1 (2.5)	1 (2.5)
自営商工業	0 (0.0)	1 (2.2)	1 (2.2)	3 (7.5)	4 (10.0)	7 (17.5)
なし／主婦	3 (6.5)	2 (4.3)	5 (10.9)	4 (10.0)	3 (7.5)	7 (17.5)
その他	2 (4.3)	0 (0.0)	2 (4.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)

(表5 調査対象者の個人的特性・社会経済的地位の続き) 人 (%)

区分	北平面 永田里			山三面 梅亭里		
	男性	女性	全体	男性	女性	全体
世帯総所得 (月平均)						
50万円未満	3 (6.5)	9 (19.6)	12 (26.1)	9 (22.5)	8 (20.0)	17 (42.5)
50-100万円	6 (13.0)	11 (23.9)	17 (37.0)	4 (10.0)	6 (15.0)	10 (25.0)
100-200万円	8 (17.4)	3 (6.5)	11 (23.9)	1 (2.5)	3 (7.5)	4 (10.0)
200-300万円	4 (8.7)	2 (4.3)	6 (13.0)	2 (5.0)	2 (5.0)	4 (10.0)
300-400万円	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (7.5)	2 (5.0)	5 (12.5)
経済状況						
困難	5 (10.9)	8 (17.4)	13 (28.3)	7 (17.5)	5 (12.5)	12 (30.0)
困難でも余裕でもない	11 (23.9)	16 (34.8)	27 (58.7)	7 (17.5)	14 (35.0)	21 (52.5)
余裕がある	5 (10.9)	1 (2.2)	6 (13.0)	5 (47.5)	2 (5.0)	7 (17.5)

表6 「生きがい感」得点の平均値と標準偏差 平均得点 (SD)

		50代	60代	70代	合計
永田里	男性	29.29 (5.93)	30.00 (10.3)	24.50 (6.95)	28.19 (8.10)
	女性	29.17 (7.14)	27.92 (5.93)	24.86 (7.45)	27.36 (6.59)
	合計	29.23 (6.23)	28.75 (7.78)	24.69 (6.92)	27.74 (7.24)
梅亭里	男性	32.75 (6.40)	33.00 (9.64)	29.75 (11.04)	30.89 (9.70)
	女性	37.29 (3.04)	32.50 (9.67)	25.38 (11.20)	31.38 (9.85)
	合計	35.64 (4.80)	32.67 (9.04)	28.00 (11.03)	31.15 (9.65)
全体	男性	30.55 (6.04)	30.82 (9.74)	28.00 (10.0)	29.47 (8.88)
	女性	33.54 (6.60)	29.44 (7.43)	25.13 (9.30)	29.20 (8.40)
	合計	32.17 (6.40)	29.97 (8.24)	26.70 (9.64)	29.33 (8.57)

「生きがい感」得点 (40点満点) の平均値は、永田里が27.74点 (標準偏差7.24)、梅亭里が31.15点 (標準偏差9.65)、最高得点は永田里、梅亭里ともに40点、最低得点は永田里が11点、梅亭里4点であった。「生きがい感」得点に対して性と年代を要因とする2 (男・女) × 3 (50代・60代・70代) の分散分析を行った結果、永田里、梅亭里の両者には年代の主効果、性の主効果および年代×性の交互作用に有意差はみられなかったが、全体では年代の主効果に有意差がみられ、50代に比べて70代が「生きがい感」得点の平均値が有意に低かった。これは、5、60代は仕事、子育てなどに忙しい時期であるが、70代はそれらの機能が縮小するからである。これは、加齢が進むほど「生きがい感」が低くなるとする日本の先行研究⁹とも一致している。

9 近藤 (2004), 青木 (2009)

3. 「生きがい感」得点と個人的特性・社会経済的地位との関連

「生きがい感」得点と個人的特性・社会経済的地位との関連を分析するため、相関分析を行った。

各変数の得点化方法は次のとおりである。

学歴（総教育年数）、居住期間および同居家族数は、各々年数が多いほど、期間が長いほど、そして人数が多いほど得点が高くなるよう設定した。主観的健康感は、①とても悪い方だ（1点）～⑤とても健康な方だ（5点）とし、健康だと感じているほど得点が高くなるよう設定した。世帯総収入（月平均）は、①5万円未満（1点）～⑩80万元以上（10点）とし、所得が多いほど得点が高くなるよう設定した。全般的な経済状況は、①とても困難だ（1点）～⑤とても余裕がある（5点）とし、経済的に余裕があるとするほど得点が高くなるよう設定した。

表7は、これらの個人的特性・社会経済的地位と「生きがい感」得点の関連を示したものである。

表7 「生きがい感」得点と個人的特性・社会経済的地位の相関係数

	永田里	梅亭里	全体	男性	女性
学歴（総教育年数）	.353*	.245	.252**	.160	.484**
居住期間	-.244	.019	-.118	-.071	-.195
同居家族数	.049	-.194	-.086	-.180	-.019
主観的健康感	.614***	.470***	.557***	.605**	.511**
世帯総収入（月平均）	.228	.317*	.279**	.355*	.201
全般的な経済状況	.394**	.165	.270*	.328*	.200

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

分析の結果、全体的に「生きがい感」得点は、主観的健康感（ $r = .557, p < .001$ ）と中程度の正の相関がみられた。つづいて学歴（ $r = .252, p < .01$ ）、世帯総収入（ $r = .279, p < .01$ ）および全般的な経済状況（ $r = .270, p < .05$ ）と低い正の相関がみられた。つまり、主観的健康感が高い人ほど「生きがい感」得点が高かった。また学歴が高い（教育年数が多い）ほど、世帯の収入が多いほど「生きがい感」得点が高いことが明らかになった。

性別でみると、「生きがい感」得点は男女とも主観的健康感と相関係数が高かった（男性： $r = .605, p < .001$ 、女性： $r = .511, p < .001$ ）。男性のみ世帯総収入（ $r = .355, p < .05$ ）、家庭の経済状況（ $r = .328, p < .05$ ）と弱い相関がみられ、女性は学歴と中程度の相関関係がみられた（ $r = .484, p < .001$ ）。

「生きがい」と主観的健康感や学歴、経済状況が関連していることは、日本の先行研究報告と同様の結果であり、文化、習慣、社会制度によって違いが現れにくい普遍的な要因であ

ると解釈できる。

4. 「生きがい感」得点と家族関係との関連

「生きがい感」得点と家族関係との関連を分析するため、相関分析を行った。

各変数の得点化方法は次のとおりである。

家族信頼、家族親密感および家族相互協力は、各々4つの質問項目（①とてもそうでない（1点）～⑤とてもそうだ（5点））の得点を合成し、平均点を算出した。家族相互交流は、3つの質問項目（①とてもそうでない（1点）～⑤とてもそうだ（5点））の得点を合成し、平均点を算出した。肯定的な回答であるほど、高得点になるよう設定した。

表8は、これらの家族関係と「生きがい感」得点の関連を示したものである。

表8 「生きがい感」得点と家族関係との相関係数

	永田里	梅亭里	全体	男性	女性
家族信頼	.204	.446**	.334**	.298	.392**
家族親密感	.149	.459**	.339**	.295	.390**
家族サポート	.338**	.296	.307**	.401*	.192
家族相互交流	.296**	.425**	.367**	.369*	.374*

* $p < .05$ ** $p < .01$

分析の結果、「生きがい感」得点は全体の家族信頼 ($r = .334, p < .01$), 家族親密感 ($r = .339, p < .01$), 家族サポート ($r = .307, p < .01$), 家族相互交流 ($r = .367, p < .01$) と低い正の相関が認められた。つまり、家族に対する信頼が高いほど、家族への親密感が高いほど、家族が互いに助け合っているほど、交流頻度が高いほど、「生きがい感」得点が高いことが明らかになった。

家族による情緒的サポートが高齢者の主観的幸福感や満足感に影響を及ぼしていることは、日本の先行研究¹⁰と同様の結果であった。

5. 「生きがい感」得点とマウル（基礎集落）のSCとの関連

「生きがい感」得点とマウルのSCとの関連を分析するため、相関分析を行った。

マウル（基礎集落）のSCは、私的・公的のマウル信頼（集落内での）、マウル規範、マウル参加（集落行事への）、そしてネットワークから成っている。

各変数の得点化方法は次のとおりである。

10 日隈ほか（2003）、高崎・日隈（2007）

マウル信頼、マウル規範およびマウル参加は、各々 3 つの質問項目 (①とてもそうでない (1 点)～⑤とてもそうだ (5 点)) の得点を合成し、平均点を算出した。肯定的な回答であるほど、高得点になるよう設定した。私的・公的ネットワーク数は、属している私的・公的組織、集まりの数を得点化した。私的・公的ネットワーク参加回数は、月平均の組織・集まりへの参加回数を得点化した。ともに数が多いほど得点が高くなるよう設定した。

表 9 は、これらのマウル SC と「生きがい感」得点の関連を示したものである。

表 9 「生きがい感」得点とマウル SC との相関係数

	永田里	梅亭里	全体	男性	女性
私的マウル信頼	.080	.375*	.256*	.276	.235
公的マウル信頼	.073	.096	.135	.230	.040
私的マウル規範	.125	.328*	.266*	.254	.285
公的マウル規範	.248	.540***	.453***	.354*	.564**
私的マウル参加	-.061	.573**	.359**	.380*	.349*
公的マウル参加	.301*	.601***	.536***	.480**	.623**
私的ネットワーク数	.266	.438**	.318**	.278	.480**
私的ネットワーク参加回数(月平均)	.350*	.358*	.371**	.405**	.355*
公的ネットワーク数	.247	.171	.206	.298	.099
公的ネットワーク参加回数(月平均)	-.238	.175	-.052	-.095	.011

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

分析の結果、「生きがい感」得点は永田里と梅亭里を合わせた全体の公的マウル規範 ($r = .453, p < .001$), 公的マウル参加 ($r = .536, p < .001$) と中程度の正の相関が認められた。また, 私的ネットワークへの月平均参加回数 ($r = .371, p < .01$), 私的ネットワーク数 ($r = .318, p < .01$) および私的マウル参加 ($r = .359, p < .01$) と低い正の相関がみられた。つまり, 公的なマウルの規範が高いほど, また公的・私的なマウル行事(集会, 歓談会, 大掃除, 祝祭など)への参加率が高いほど「生きがい感」得点が高いことが明らかとなった。また, 私的ネットワーク数が多く, 私的な組織や集まりに参加している人ほど「生きがい感」得点が高いことが示された。これらの結果から, マウルの SC と「生きがい感」には関連があることが明らかになった。

このたびの調査では, 第一に, マウルにおける役割・存在価値が, 第二に, 親しい者同士のふれあいが住民の「生きがい感」と関係していることが明らかになった。つまり, マウルの規範を遵守し, マウルの行事に参加することは, すなわち集落(マウル)に貢献していること, 集落(マウル)の中において役割や存在価値があることにつながっており, 「生きがい感」を高めていることを示していると考えられる。もう一方は, 私的ネットワーク, つまりごく親しいプライベートな集まりやふれあいを通して, 生活上のストレスを発散したりするなど精神の安定が図られているのではないかと推測される。

参 考 文 献

- Robert. D. Putnam／訳：河田潤一 (2001), 『哲学する民主主義－伝統と改革の市民的構造』, NTT 出版株式会社.
- 青木邦男 (2009), 「高齢者向け生きがい感スケールの因子構造とその得点の検討」『山口県立大学学術情報』 第 2 号 [社会福祉学部紀要].
- 赤澤・水上 (2008), 「地方居住高齢者の社会的ネットワークと主観的幸福感」『仁愛大学研究紀要』 第 7 号 : 1~14.
- 市田行信 (2007), 『自律的かつ持続的な地域づくりに向けたソーシャル・キャピタルの定量的研究』, 京都大学博士論文.
- 岡本秀明 (2008), 「高齢者の生きがい感に関連する要因」『和洋女子大学紀要』 第48集 家政系編 : 111~125.
- 神谷美恵子 (2004), 『生きがいについて』, みすず書房.
- 近藤 勉・鎌田次郎 (2003), 「高齢者向け生きがい感スケール (K-1 式) の作成および生きがい感の定義」『社会福祉学』 43(2) : 93~101. 日本社会福祉学会.
- (2004), 「高齢者の生きがい感に影響する性別と年代から見た要因」『老年精神医学雑誌』 15(11) : 1281~1290
- 高崎義幸・日隈健一 (2010), 「高齢社会と地域福祉 (16) —韓国農村地域における高齢者の生きがい感と関連要因—」『広島修大論集』 第50巻 第 2 号 : 177~194.
- (2007), 「高齢化社会と地域福祉 (13)」『広島修大論集』 第48巻 第 2 号 : 289~322.
- 高橋勇悦・和田修一編 (2001), 「生きがいをめぐる諸外国の事情」 : 206~214, 『生きがいの社会学』, 弘文堂.
- 鶴若麻里 (2003), 『語り (ナラティブ) からみる高齢者の生きがい』, 早稲田大学大学院博士論文.
- 野村千文 (2005), 「「高齢者の生きがい」の概念分析」『日本看護学会誌』 25(3) : 61~66.
- 内閣府国民生活局 (2003), 『ソーシャル・キャピタル : 豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて』.
- 内閣府 (2005), 第 6 回 「高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」.
- 農林水産省農村振興局 (2007), 『農村のソーシャル・キャピタル—豊かな人間関係の維持・再生に向けて—』.
- 長谷川明弘 (2003), 『高齢者における地域別にみた「生きがい」の実証研究』, 東京都立大学大学院博士論文.
- 日隈健一ほか (2003), 『加齢に生きる人たち』, 広島修道大学総合研究所.
- 藤澤由和ほか (2007), 「地区単位のソーシャル・キャピタルが主観的健康感に及ぼす影響」『厚生指標』 第 54巻第 2 号 : 18~23.
- 藤本弘一郎ほか (2004), 「地域在住高齢者の生きがいを規定する要因についての研究」『厚生指標』 第51巻 第 4 号 : 24~32.
- 内閣府 (2010), 平成22年版 高齢社会白書 (<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/index-w.html>).
- 박희봉・이희창・전지용 (2008), 「가족 사회자본이 집단가치와 삶의 만족에 미치는 영향」. 『현대사회와 행정』. 제18권 제 3 호 : 51~76
- 한은정 (2010), 『중증 지체장애아동 어머니의 양육스트레스, 사회적지지 및 심리적 안녕감의 관계』. 서강대학교 석사학위논문.
- 이승철 (2009), 『지역축제의 사회적 자본 형성에 관한 연구 -강원도 동해안지역 동제를 중심으로-』. 강릉대학교 대학원 박사학위 논문.
- 임우석 (2009), 『사회적 자본과 노인 생활만족도의 관계에 관한 연구』. 서울시립대학교 박사학위논문.

Summary

Research on Community Welfare in the Aging Society (17)

Yoshiyuki Takasaki and Takeyoshi Higuma

본 조사연구는 지역 레벨의 Social Capital 과 한국의 농촌지역 거주 중고년의 삶의 보람감과의 관련을 밝히기 위한 예비적 조사를 목적으로 하고 있다.

전라남도 최남단에 위치한 해남군의 북평면 영전리와 산삼면 매정리의 2곳을 조사대상 지역으로 선정하여, 2010년 7월부터 8월까지 50대 ~70대의 중고년자를 대상으로 설문조사를 실시하였다. 분석대상은 영전리가 남성 21명, 여성 25명의 합계 46명, 매정리가 남성 19명, 여성 21명 합계 40명이었다.

설문지구성은 중고년의 삶의 보람감, 가족관계, 마을 수준의 Social Capital, 피조사자의 개인적 특성으로 구성되어 있다. 분석 방법은 빈도분석 후 통계 소프트웨어 SPSS 12.0 K windows 판을 사용하여 삶의 보람감에 대해 성별과 연령을 요인으로 하는 2 (남·녀) × 3 (50대·60대·70대) 의 분산분석을 실시하였다. 다음으로 삶의 보람감과 개인적요인, 가족관계 및 마을 SC 요인과의 관련을 밝히기 위한 상관분석을 실시하였다.

분산분석의 결과 성별에 따른 통계적으로 유의미한 차이는 나타나지 않았으나 연령에 따른 차이가 나타났다. 50대 60대에 비해 70대가 삶의 보람감의 평균치가 유의미하게 낮았다. 50대와 60대는 일, 자녀 양육 등으로 바쁘게 생활하고 있으나, 70대는 그러한 기능이 축소되기 때문에 판단되었다. 상관분석의 결과, 마을의 SC 와 삶의 보람감 사이에는 어떠한 관련이 있음을 짐작케했다.

이상의 조사를 통해, ①집락에서의 중고년자의 역할·존재가치 ②친한 사람들과의 다양한 소통이 주민의 삶의 보람감과 관계를 갖는다고 나타났다. 마을의 규범을 준수하며 마을의 행사에 참가하는 것이 마을에 공헌하는 것, 마을 안에서의 역할과 존재가치가 있는 일로 이어져, 그것이 중고년자의 삶의 보람감을 높이고 있을 가능성을 시사하고 있다. 또한 사적 네트워크, 즉 친근하고 개인적인 모임과 상호 소통을 통해 생활 속의 스트레스를 발산하는 등의 행위가 중고년자의 정신적 안정으로 이어져 삶의 보람감을 높인다고 할 수 있다.